「文学の國民性」[[1]](#footnote-1)

李光洙（朝鮮文人協會會長）

【1】―眞に日本的なる文學精神―

物の米は明治、大正を通じての主なる力であつた。その力は必要なものであつたし、それによつて日本が力を増したことも事實であるが、同時に米を學ぶことに中したり、それが行き過ぎて所謂心酔のを生じ、米にまでつた者もくはなかつたのである。

しながら、日本人は何なる場合にも自をする國ではない。大正十二年の關東大より国にき自己の神がつて、日本の、認のが高くなつた。それは方面にては、主至自由主義より中心の日本主への歸となり、方には、左至至上主より、日本神を明することを目とする所謂大のとなつてれたのである。

大は家等はを取るに足らざるものとしてするか、して來たのであるが、これは米學で仕込まれたのす所であつて、決して正しい認ではなかつた。成所謂大物はくはその神に於いてさと高さとを缺き、調なるをれなかつたが、併しそれが勃たる國の神のびであり、將に築かれんとする、新國學の事であつたことはまれない。明治以來の學の主流はバタき文藝をば、これこそはお前達ののには合わないが、眞に高なであるとして國大に付けたし、一方國大の方では、に見えない物のおの如く、これは不味いとひながら、美味しい風をして家達の献立をみにして來たのであつた。そのされたるが大につて爆發したともいへる。所謂米のから見れば、これはかはしい落に相ないであらうが、國學という見地から見れば、大切な事であつたのである。

大學の先驅開があつた上に、此度の興亞の聖戰が起つて、こゝに國神はいやが上にもされた。日本の心、日本の魂にはつきりとが醒めたのである。日本なもゝのしさ、大さに今したのである。米は日本人のとすべきでないのみならず、日本神から生まれ育まれたこそは、に日本人自のたるのみならず、今や行つたの米にも取つて代はらねばならぬ、明日のであるとの信を得たのである。

かゝるがに、これからの日本學は米學のから分れねばならない。今大學の科で□文學といへば米學をとする様であるが、このやうなは然清さるべきであらう。だからといつて、米學の研究を無用だといふのではない。米學は米學で、日本學は自ら日本學だとはつきり認すべきだといふまでである。

々は國生活の分泌物である。やと同じくその身體から分泌した或物である。しは（や風やや至は學も正しい意では、國生活の分泌物であるのだが）やのく嫌なものでなくて、ばしいましい分泌物であり、それが今度はに、國生活にき意のびととをへる様な、さういうの分泌物であるのだ。はにへすべきであらう。己が分泌物にて作つたものを己がにするのである。（『京城日報』1939年11月14日）

【2】―文章報國の眞の意義は―

は或國生活の分泌物であるがに、その内や色や匂やは、その國至その國の生活により特色づけられるのはに必然であらねばならぬ。これギリシヤ學、度學、學等と別される所以である。であるから、日本學が日本人のをるのは當然のことであつて、ろ日本人のの最もい學であればある、よりく日本學であるべきである。

然らば學の問は何にするか。成る學その他の物にはがある。時間には古代の作品が吾々現代人のをち、間にはスペインやスカンヂナビアの作品が、吾々東人の心にく。かういふ意にいて、學至のがあることは事實であるが、それはも西建物と日本建物とにもややや所があり、風とをくることにいて通であるといふ様なものであつて、それ以上の何物でもない。

一時日本にはなるものが流行つて居た。それは西式に若日本式を加味したであつたが、今はに飽きられてつた様である。今では日本風か、そこまで行かなくてもは式でも内だけは日本風にしたが喜ばれて居る様である。らく今度の國神後は、西真のでもなく、また、今一で流行つて居る様な、内和のちやんぽんでもなく、風を然してしまつた日本の新が生れることであらう。學やもその通りだとふ。

今日の所謂現役作家たちの中には、だに漆喰の禿げたにこびり附いて居る者が相當ある様だ。人間もかたつむりと同様に自分のを一つ作つてふと中々それからけ出ることは難かしい。生活力のな者のみく殻をすることが出來る。今日はくのに取つて一大發を要する時ではなからうか。ちアジア大造の曠古の氣をば、國のし切つた大神を一ひ込んで、この時代、この精神に相應はしい、大きい、力いをふべき時ではなからうか。り來たりの辺記やや、流の、や、人の方面を大することや、イデオロギーの小児や、そんな者は須らく、時代の篝火の中にげ込んでつて、のにいそしむ大國の神分泌物に相應はしい學を作る時ではないだらうか。

人の神動員は正にこのにうてなさるべきである。非時の人だからといつて、必ずしも時物や、な物ばかりを書くのが後仕ではない。時にはさういふものも必要であらう。し、かゝる非時において國家が人にむものは、それよりは、もつともつとくうねりの太く高い或物ではなからうか。國の魂を底からゆり動かし、い立たせるやうな雄叫びではなからうか。それは々たるイデオロギーやプロパガンダなものではなくて、ろな、信仰なものであるやうな氣がする。今日吾々日本人の使命は正にかゝる學を作ることにあるとふ。國の眞の意がこゝにあるのではないだらうか。（『京城日報』1939年11月16日）

【3】―國民性と文學との關係―

學を作るといつたが、學は作るものではなくてむものである。分泌である。作爲のあるのは眞のではない。いはゆる斧鑿の痕がなくてこそ眞の品なのである。イデオロギー學なら作りもしよう。御用學なら代書人にでも作らせたがい。然しながら本當の學は作らうとして作られるものではない。正にそれは魂から自ら發する光でありであるべきである。は人なりである。において吾々人は何よりも先づ自の造、自のを必要とする。をしていとも清らかに、いともなる魂を以つてしすることをしなければならない。茶をば曙の山に立つた様な気魄にきへなければならない。すべての、のキーの埃をい、歪みを匡し、いとも清なる心を以て大國民の精神のりを□受せねばならない。これは自家や早老に陷り易い。吾々人としては、かに一にひない。しそれは吾々人たるもの、でもが必ず通らねばならぬ鎔鑛爐である。

はいふであらう、それは學を時代神の奴隷たらしむることであると。余はふるであらう、然りと。又然らずと。學は時代神をしなければならないし、またせざるを得ない。學はこの意味において眞にもへられやう。しながら、同時に、學時代神において、そのを流れる遠の流れをしなければならない。ちなるものゝなかに靈性なるものをまなくてはならない。此の意にて、學はな象徴物にへられよう。もつと適切にいへば學は、時代神や、時代相[を]、遠なものの現はれとしてし表現しなくてはならない。かゝるがに學は、時代神を無視することにつてゞはなく、時代神をし實現することにつて、その時を得するものである。これが然り、又然らずとへる所以である。

最後に朝で書かれる學にいて一しよう。朝の新しい學動はに三分の一を經へ居り、その間數百人の人達の力によつて今や數き作品を出してをり、に最近三年來文出版物の發行や、賣行がにんになつた。朝學は今やが出來たといつてもよい。

然るに朝の人および學は今や一大転機に達してゐる。それは朝鮮の學は日本國學の一であるといふ明らかな認とい意のことである。體に□□□、併合□日きせゐでもあつたらう。從來の朝鮮人は、つい最近までも、國意にめてゐなかつた。從つて、その作品にも國がしみ込んでゐない。□□□を回して徒に着するやうな□□主なものでなければ□□マルクシズムのイデオロギー物であり、一いはゆると自した流の主か、人學を得意とする一があつたのみで、日本國をとして立つた人も作品もなかつたのである。

ところがアジア大陸に流されたのは朝人になるをしたく、朝人の裡にも新しいをしたのであつた。學洙氏の『集』や熙氏の『行』は新しいの生んだ朝學作品の標本であるが、今後の朝學は一途に此のの方をるであらう。かくすることにいて朝は國の一、朝學は國學の一たるの利とを得することであらう。

國をれて學はない。（『京城日報』1941年11月17日）

1. 『京城日報』1939年11月14日~17日連載 [↑](#footnote-ref-1)